

組み合わせ抽選会が始まった。

^{グランドホール}大広間 階上の控え室から、アリーナたちはその様子を眺め、選手達の実力を押し量ろうとしていた。

「またBなの？」

「目をつけた選手が、ここまでBブロックに固まるとはのう」

そして、特別招待選手として、アリーナが選手達に紹介される、その時がやってきた！

*

この物語は、後に「不屈の王女殿下（ハイネス）」と呼ばれる、サントハイム聖王国第一王女、アリーナ・フォン・サントハイム殿下の、熱く激しい闘いの記録である！

熱血格闘系・ドラクエ4二次創作小説

「不屈の王女殿下（ハイネス）」

～エニックス「ドラゴンクエスト4・導かれし者たち」第2章より～

第5話 「組み合わせ抽選会（後編）」

あさづけ兄貴

^{グランドホール}大広間、入り口の扉の前。

「ここでお待ち下さい。陛下が『入れよ』と仰せになりましたら、お入り下さい」

「分かったわ。ありがと」

アリーナの眼前の扉の中からは、大臣の声が聞こえてくる。

「以上をもって、31名全てのくじ引きが終了した。なお、欠席したデスピサロ選手に関しては、残ったAグループ1番に入ることとなるが、皆、異存はないな」

選手達から返事がないのを確認し、大臣は続けた。

「ではここで、国王陛下より皆に伝える事がある。謹んで拝聴するように」
そして、王に対して一礼し、壁際に下がる。

「では」

王が言った。

一瞬の間を置き、選手を見回して、続ける。

「選手の組み合わせが決定したところで 先ほどのマクダニエルとの約束もある。

『33人目』の出場者を紹介するでしょう」

途端に、^{グランドホール}大広間に緊張が満ちる。

(ついに、来やがった)

(何者なんだ、その「特別招待選手」とやらは ?)

小声で囁く選手もいる。

「では、さっそく呼ぶでしょう。 アリーナ姫、入られよ！」

扉が、開いた。

そこに立っていたのは、比較的小柄な、少女だった。

軽くカールした、栗色の長い髪。

頭の頂には、^{ディープブルー}紺青の、先の尖った、独特のデザインの帽子。

^{オレンジ}橙色がかかった黄色の、ミニのワンピース。

肩からは、帽子と同じ^{ディープブルー}紺青のマント。

黒のストッキングに、^{オレンジ}橙色のブーツ。

ベルトのバックルには、円と十字 「調和」と「神の恵み」の紋章。

そして、何より、強い意志を湛えた、燃えるような赤茶色の瞳。

そんな少女が、扉の向こうに、自信に満ちた表情で、扉の向こうに仁王立ちしていたのである。

*

(なにっ?)

(女 いや、少女 だと ?)

グランドホール
大広間は、一瞬、沈黙に包まれた。

当然のことながら、選手達は皆、「特別招待選手」として、高名な武術家、そうでなくとも、ひと目でそれと分かるような、いかにも屈強そうな男を予想していたのである。

それだけに、アリーナの姿は、完全に彼らの意表を突いていたのだ。

その沈黙を破るように、王が言った。

「紹介しよう。アリーナ・フォン・サントハイム殿下。サントハイム聖王国、国王ベルンハルト陛下の御一人娘であらせられる」

アリーナは、王女としての正式の礼に則ったやり方でなく、何も言わず、ただ、頭を下げた。

王女ではなく、ひとりの格闘家としてこの場に臨んでいる、という決意の現れである。

「皆、狐につままれたような顔をしておるな」

王が、なぜか、楽しげな顔で言う。

再び選手達の顔を見回すと、少しずつ、アリーナを見た当初の衝撃は薄れてきているようであった。

しかし、その代わりに彼らの表情を支配していったのは、不審と疑問。

(なぜ、あのような年端も行かぬ娘が、この大会に出場する?)

(しかも、一国の王女ではないか?)

(世間知らずのお姫様が、コネで出場したのか?)

(この大会の意味を、重要さを、分かっていないのではないか?)

それを見て取った王が、すかさず先制する。

「何やら、納得が行かない者もいると見える」

「その通りだ！」

選手達の中から、怒号が上がる。

そして、ひとりの男が、その中から立ち上がった。
背が高く、頬のこけた、痩せた銀髪の男だった。

「なぜ、このような娘を出場させるのか！ この大会は世界最強の武術家を決める大会
ではなかったのか！」
かなり腹を立てている様子だった。

しかし、エンドール王は、そんな怒号にも全く動じることなく、さらっと言ってのけた。

「その通りだが」
「ならば、なぜ！」
なおも追求する選手の瞳をじっと見返しながら、静かに、王は言った。

「そなたの言う通り、この大会は世界最強の武術家を決める大会。そして、だからこそ、
余はアリーナ姫にこの大会に出場するよう、頼んだのだ」
「？」
選手は、言葉の意味が分からない、といった表情をしていた。そんな彼に追い打ちをか
けるように、王が言った！

「隠し立てしてもしかたがない故、言ってしまうが このアリーナ姫は、余が
オーギュスト・ド・エンドールが、父親として娘を守るために放った、刺客だ」

＊

「！」
「なっ！」
「刺客」
「刺客だと!？」

その言葉の持つあまりの衝撃に、一瞬、選手全員が打ちのめされた！

(王様 ?)
アリーナも、一瞬、王の顔を覗き込む。

「それはどういうことだ！」
「他国の王女が、刺客だと！」

立ち上がり、口々に叫ぶ選手。
まさに、パニック、と言って良い光景であった。

「こら、静粛に！ 静まるのだ！ 控えんか！」
大臣の制止も、全く効を成さない。

「ふむ」
しかし、あたかもこの状況すら予知していたかのように、エンドール王はいまだ悠然と構えている。

「よし、そなたらの疑問に全て答えよう！」
その王の言葉を聞き、ようやく、^{グランドホール}大広間に平静が戻ってきた。

「まず、先ほどの『刺客』という言葉は、必ずしも適切でなかったかも知れぬ。だが、そなたらを優勝させぬため、余がアリーナ姫にこの大会への出場を頼んだのは、事実だ」

「お父様？」

「こりゃあ随分と大胆な行動に出られたもんじゃのう」
全く予想だにしていなかった台詞を聞いたモニカと、やはり己の予想だにしなかった王の行動を見たクリフトとブライは、半ば呆然と、事の成り行きを見つめていた。

「まさか、国王陛下が、あそこまで内幕を話されるとは」

「確かにな。僕にも予想できなんだ」

「正直、余は後悔しておるのだ。モニカとの結婚の権利を、優勝の褒美になどするのではなかったとな、かわいい一人娘だ、その一生をこのような大会で左右しようとしたのは、あまりに軽率であった」

(ふふ 言いよるわ)

心の中で、ブライは苦笑を漏らす。

(モニカ姫に迫られ、困り果てたうえでの選択じゃろうが？ まあ、嘘についてはおらぬがの)

悲しそうな顔で、王は続ける。

「とはいえ、触れて回った通達を、今さら取り下げることができぬ。そこで余は考えた
もし、余の意を酌んだ、女性の選手がこの大会に優勝してくれれば、モニカは
嫁に行かずとも済むとな」

「ちょ、ちょっと待ってくれ、王様！」

また別の選手である。

「ということはよお その王女様を勝たせるつもりなんだろう？ それって、禁止
されてる『運営側の試合への干渉』ってやつじゃねえのか？」

*

「ほう、なるほど」

ブライが、感嘆の声をあげた。

「いい切り口じゃのう」

「ですね」

「？」

うなづくクリフト。一方、モニカは、話が良く呑み込めていないようだ。

「つまりですな」

ブライが説明する。

「国王陛下がルール違反を冒しているのではないかと、言うておるのですよ。あの者は」

「そんな！」

「左様。陛下はルール違反など冒しておりませぬ」

「つまり、そなたは、余が何か裏工作をして、アリーナ姫を勝たせようとしている、と、
こう言うのだな？」

「違うのか！」

「ふむ ならば、言い方を変えよう。もし余が、アリーナ姫を出場させはするが、
勝たせようとはしないとしたならば ただ出場させただけで、援助も裏工作も
しないとしたならば、それは果たして『運営側の試合への干渉』になるだろうか」

「？」

選手は、眉根を寄せ しばらく考え込んだ後、言った。

「そりゃ 違う、だろうな」

「そうか、違うか。そうかそうか」

王の顔に、満面の笑みが浮かんだ。

「ならば答えよう。それが『干渉』でないならば、余は決して『干渉』などしておらぬ。
なぜなら、余がやったことが、まさにそれだからだ。余は、アリーナ姫を出場
させはするが、決して援助するつもりはない」

「おお、目を丸くして驚いておるわ。あの選手」

ブライが、楽しげに言う。

「理解できぬじゃろうなあ、あの者には まあ、陛下がまた説明なさるじゃろう」

「そ、それじゃあ」

「それじゃあアリーナ姫が優勝できるはずがない そう言いたいのだな？」

「お、おう」

こくこくと頷く選手に、笑みを浮かべたまま、王が答えた。

「ところがな それが、できるのだよ」

アリーナもまた、口元に笑みを浮かべ、それを聞いていた。

「ちょっと待て。ますます分かんねえ！」

困り顔で、選手ががなりたてる。

「すると何か？ 王様が何もしなくても、あの王女様は優勝する、それだけ王女様が
強い、とでも言うのか？」

「そうだ」

「えっ？」

彼は思わず、聞き返した。

しかし、王はやはり、こう言った。

「そうなのだよ」

「結局、あの者には分からぬようすな、姫様の実力が」
階上では、ひき続き、ブライが語っていた。

「アリーナ姫様の？」

「まあ、見る者が見れば、ああして立っているだけでも、姫様の実力はある程度
分かります。どれくらい強いのか。恐らくあの中にも、それくらいの眼力を持った
者はおるでしょう」

(愚か者が)

選手の列の後ろで、そう、心の中で毒づいていたのは、<拳聖>ミスター・ハンである。
(あの^{プリンセス}姫君の、あの^い気を見て、なお実力が読めぬのか あるいは、気を見ることすら
ままならぬ未熟者か)

彼だけではなかった。

(まるで刃物のような闘気です 相当の達人でも、こうはいかない)
(体も相当鍛えられている。あたしより上だわ まあ、あたしには魔法があるけどね)
(パワーは俺にかなうまいが、スピードは相当にありそうだ)
(強そうなんだな。闘うなら、きっと本気でやらないとダメなんだな)

ラゴスが。

ビビアンが。

サイモンが。

そして、ベロリンマンが。

それぞれの感覚で、彼女の実力を、正しく評価していたのである。

「彼女は優勝できる。正確には、優勝できるだけの実力を明らかに持っている 余は
そう思ったからこそ、アリーナ姫様に頼んだのだ。娘を救ってくれと」

そう、エンドール王は言い切った。

*

「とまあ、ここまで脅しておいて何なのだが 」

突然、王は明るい口調になった。

「そなたらのうちの誰でも良い、このアリーナ姫と、一回戦の前に、『特別予選』を戦っても良い、という者はおらぬか」

「特別」

「予選？」

グランドホール
大広間がざわめき始める。

「まあ、簡単な話だ。この試合に勝った者が、この大会に出場できる。負けた者は、大会に出場する事なく去る。それが特別予選。それだけのことだ」
王が、事もなげに説明する。

「特別予選？」

一方、階上の控え室である。

「そんな制度が？」

「僕も初耳じゃな モニカ姫？」

「いえ、お父様は、そんな制度があるとは一言も」

「なるほど」

ブライが、顎髭をひと撫でした。

「つまり、今回陛下が作ってしまった、というわけですね」

「さあ、どうだ。我こそはと思う者は名乗り出よ」

しかし、名乗りを上げる者は誰もいない。

当然である。この特別予選を闘う者は、無条件で戦わねばならぬ試合が一戦増えることになる。そして、それに対する見返りは、何ひとつない。

絵に描いたような、ハイリスク・ノーリターン。

それを考えれば、名乗りを上げる者が、いようはずもなかった。

「さて 困ったものだ」

わざとらしく、腕を組み、溜め息をひとつ付いて 王は、アリーナに話しかけた。

「さて、どうしたものかな。アリーナ姫」

「じゃあ、ちょっとだけ話していいですか？」

「おお、良いとも」

「ありがとうございます」

アリーナは、軽く王に頭を下げると、改めて選手達の方に向き直り話し始めた。

*

「さっき、王様がおっしゃったのは、全部本当のこと。出場して欲しいと頼まれたことも、何も援助できないって言われたことも」

皆、アリーナの話に聞き入っている。

「そして、私が本気で優勝するつもりだったのも、本当」

口元に、ほんの少しだけ笑み。

それは、自信なのか。

「でもね」

口調が、真剣そうなそれに変わる。

「ひとつだけ、王様に話していなかった事があるの。それを今から話すわ　きっと、話さなければならない事だから。そして、これを聞いて、私と戦いたくなる人が、もしかしたら、いるかも知れないから」

「やはりな　話されるか」

ブライが、ぼそっと言った。

「えっ？」

「モニカ姫様　儂が先ほど、姫様に『貴方が一体何なのか、そして自分が一体何と戦おうとしているのか、選手たちに教えてやって下され』と言うたその答えが聞けませんぞ。お聞き逃し召さるな」

「私は、ここまで来た　」

長い間を取った後、アリーナは話し始めた。

真剣な表情だった。

「サントハイム、テンペ、フレノール、東サントハイム砂漠、^{バードソング・タワー}さえずりの塔
そして、この武術大会　　」

彼女の気が、熱を孕んで、少しずつ、この^{グランドホール}大広間に満ちてゆく。

「私の望みを叶えるために、私は進み続けた　　テンペの女の子たちを救うために、
私の偽者を助けるために、父様の声を取り戻すために。そして今は、大事な友達の
未来を彼女の手に取り戻す、その手助けをするために　　私は、ここまで来た」

「貴方様の事ですぞ、モニカ姫様」

「姫様は、貴方様のことを、あんな風に思ってるんですね」
プライが、そしてクリフトが優しく言う。

「アリーナ姫様　　」

「私は、私の望みを叶えるために、いつでも全力を尽くしてきたわ」
アリーナの口調は、変わらない。
「私の前に立ちふさがる物は、全て払いのけてきた。時には、^{その命すら奪って}」

「！」

電気に打たれたように、ハンの体が一瞬震える。

「時には、なんてもんじゃないわね　　もう、いくつとも知らない命を、私はこの拳で
奪ってきた　　この拳は、本当に多くの血を吸っているの。　　そうやって私は、
ここまで来たのよ」

自分の右拳を、慈しむように、左手で撫でる。

「もちろん、他者の命を奪う事、それ自体は決していい事だとは思わない。でも、
それを避けて、全力を出さずに負けるよりは、全力で戦いたい、そして勝ちたい。
絶対に　　。だから」

彼女の気は、いまや、熱き奔流と化しつつあった。
息が詰まりそうな重圧を、選手達は感じていた。

「私は、決して逃げない。相手の命を奪う事からも、自分の命を落とす事からも。
決して逃げずに、恐れずに、これからも私は戦うわ」

握った右拳に力を込め、胸の前に持ってくる。
その姿勢で、彼女は、力強く言った。

「この拳でね」

その瞬間、熱い風が、^{グランドホール}大広間を吹き抜けた！

*

「お聞きいただけたか、モニカ姫様」
ブライが、モニカの顔を見る。

モニカは、泣いていた。

「あれが、姫様です」

ブライが続けた。

「他者の命を奪うは人の業ごう　そして、領民を抱える王族なら、それはなおさらの事。
その業を、格闘という、殺生という直接的な形で、姫様は深く自覚しておられる。
そしてそれから逃げる事なく、それを乗り越えようとしておられるのです」

クリフトも、後ろで頷いた。

「ええ」

モニカは、涙声で、ただ、そう答えた。

「さて、誰があの姫様と戦うのかのう　楽しみじゃて」

＊

やがて彼女は、拳をすっ、と下ろした。
晴れやかな表情だった。

「で どうするの？ 誰が私の相手をしてくれるの？」

誰も、名乗り出ない。

先ほど誰も名乗り出なかったのは、選手達が皆、一試合増えるリスクを計算してのこと
だった。

しかし、今は違った。

彼らはようやく理解したのだ。

自らの眼前の少女が、いったい何なのか。

自分が彼女に勝てるのか、そして、彼女と戦いもし破れれば、一体自分がどうなるのか。

(何だこいつ 何だって、あんな娘がこんなに怖いんだ ?)

(負ければ死ぬ いや 殺される !)

だからこそ、そう、だからこそ、誰も名乗り出ることはできなかったのである。

ただひとりを除いては。

＊

すっ、と、手が上がる。

「よろしいか、^{プリンセス}姫君」

「ええ」

アリーナが、真剣な目をして答える。

ゆっくりと立ち上がった、緑色の拳法着。

弁髪が揺れる。

<拳聖>の異名を持つ、世界最強の格闘家。

「ハンと申す」

「知ってるわよ。ミスター・ハン」

「光栄だ」

「昔、貴方の大ファンだったから。私」

ハンは真剣な面持ち。アリーナも、口元に微笑が浮かんでいるものの、変わらず目は真剣だ。

「ほう」

ハンも、苦笑めいた笑みを浮かべた。

「今は？」

「弱くなった貴方に、思い入れはないわ」

「！」

「あちゃー ミスター・ハンに喧嘩売ってますよ、姫様」

クリフトが、心配そうな顔で言う。

「やる気じゃな、姫様。ミスター・ハンを、戦いに引きずり出す気じゃ」

「弱くなった？」

ハンが表情が、一点、険しさを増す。

「違うの？」

挑発するような口調で、アリーナ。

「『人を殺さぬ拳』を追い求めること <拳聖>を目指すことと、弱くなったこととは、断じて違う」

「そう？ 私に言わせれば、ただ逃げてるだけね」

不敵に笑う。

「私は言ったわ、相手の命を奪う事からも、自分の命を落とす事からも、決して逃げない、って。そこが違うのよ、貴方とは」

「何を言っているの？」

モニカが、狼狽した表情をしている。

「先ほど、姫様が言いかけてましたな。5年前の事件がどうの、と」
ブライが、淡々と語る。

「あの男は　　ミスター・ハンは、5年前、試合中に、誤って相手を殺してしまっておるのです」

「えっ　　！」

「それまでのハンは、攻撃のスピードとパワーで押しまくる、暴れん坊のような格闘家じゃった。そして、破壊的といえるほどの強さを持っていた」

ブライの話は続く。

「ところが、その事件以来、彼は変わった。嵐のような攻撃は影を潜め、相手の攻撃をじっくり見極め、受け切り、かわし　　そして、一撃をもって勝つ。ハンは『相手を決して殺さない』拳をふるう格闘家となったのです」

目を閉じる。

「命を決して奪わぬその拳、そしてその風格から、いつからか彼は<拳聖>と呼ばれておるのですが　　昔の荒れ狂う攻撃が好きだった姫様には、それが我慢ならないのでしょうな」

「　　」

「あるいは、姫様のおっしゃる通り、確かに彼は『逃げている』のやも知れませんが　　相手を殺すような拳から。相手を殺すだけの力を出す事から」

＊

「私より貴方の方が強い　　そうおっしゃるのか」

「実際に証明してみる？」

「実際に、か」

「そ」

澄まし顔で、事もなげにアリーナは答える。

「　　」

ハンは、わずかの時間、腕を組み、目を閉じ　　そして、再び目を開く。
アリーナの顔を、じっと睨みつける。

鼻筋の通った、整った顔立ちに似合わぬ、自信に満ちた笑み、そして意思の^{たぎ}滾る瞳。

不意に、ハンは軽く笑った。

「いいだろう」

その一言に、^{グランドホール}大広間がどよめく！

「陛下！」

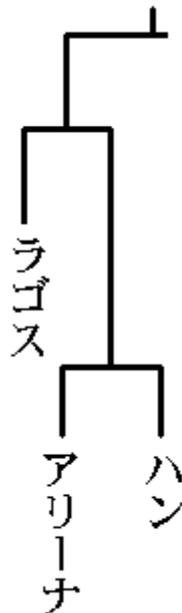
ハンが王に向かい、大きな声で言った。

「特別予選、ぜひともこのハんに戦わせていただきたい。よろしいか」

「うむ」

王も大きく頷いた。

それと同時に、兵が、トーナメント表の「ハン」の名を消し、書き換えた。



再び、ハンはアリーナへと視線を移す。

「^{プリンセス}姫君 私の5年間は、<拳聖>としての5年間は、決して誤りでなかった事を、証明して御覧に入れよう」

真剣な顔で言うハンに対して、表情を変えず、アリーナは言った。

「ダメよ。それじゃ私には勝てないわ」

「!？」

「貴方を、昔の貴方に戻してみせる。＜拳聖＞なんて名前を背負う 弱くなる前の貴方に。そして、その貴方に、私は勝つ」

二人の間に散った火花が、選手達の目には、確かに映った。

その光景を見ながら、ラゴスは、ビビアンは、サイモンは、そしてペロリンマンは

(あの姫様には悪いが、応援させていただきますよ、＜拳聖＞ 私と戦う約束がありますからね)

(どっちが勝っても、恐らく上位に上がってくる まずはその拳を見極めさせてもらおうわ)

(どちらでもいい 上がってこい。この俺が叩きつぶしてやる)

(楽しみなんだな。楽しみで仕方がないんだな)

そう、考えていた。

*

「ふっ」

再び軽く笑うと、ハンは言った。

「戦いの準備を致す故、これにて失礼」

それだけ言うと、ハンはくるっときびすを返し、後ろの扉に向けて歩き出した。

並み居る選手達が、横を通るハンの顔を見上げる。

彼の瞳に、迷いはなかった。

扉の前で、ハンは立ち止まると、一言

「貴方を倒すのは<拳聖>だ」

そう言って、扉を開き、^{グランドホール}大広間を出ていった。

戦いが、始ろうとしていた。

(つづく)

<次回予告>

前代未聞の「特別予選」開始！

果たして、「拳聖」と謳われた名格闘家、ミスター・ハンを相手に、アリーナはどのような闘いを見せるのか？

「不屈の王女殿下(ハイネス)」第6話 「特別予選」

ついに、不屈の^{ハイネス}王女殿下の伝説が、その幕を明けた！
